

遅くなってしまったが昨年のお話をさせていただくことにしよう。

頭が痛かった。なぜって麦はまあまあだったけど、大豆の収量が全く上がらなかった。平年の半分になるのだからすっかり落ち込んでしまった。原因は異常気象のせいにしてしまえば簡単だが、そのような悪条件下の中でも大豆を平年並みの収量で仕上げる達人がいるのも事実だ。

現場の勘違い生産者

そこで、選択と言う単語が発生する。上手くいっている人に聞くか、聞かないかの選択だ。穀物農業はアメリカも含め日本も世界中のほとんどが個人事業主になるが、個人の思いをフル活用で表現できる職業だと思っっている勘違い都会人も多い。都会人だけだったら許せるが、現場の生産者にも普通にいるから驚きである。

賢者から学ぶことは多くてもハンカクサイ（バカの北海道弁）連中から学ぶことは何もない。あえて探せと言われると良い反面教師以外の何物でもないことがほとんどだ。

実例を述べてみよう。私が住む長沼町は空知の一番南に位置して、夏の最高気温は北部空知地方よりも寒い。南だから暖かいと思われがちだ

が現実には違う。長沼で11月15日に播種した春小麦（秋小麦ではない）と北に25kmに位置する岩見沢で5月の連休中に播種した同じ品種の春小麦の収穫が1日しか変わらないことが気温の違いを証明することになる。

こんな事例も。豊かな緑の平野が広がる十勝の7月早朝の湿度が90%を超えることはあるだろうか。長沼は5月から太平洋高気圧が張り出す7月中旬までは朝8時くらいまで海霧が入り湿度が高い。数字で言うとう90%か100%の湿度の日が普通にある。

何が問題なのか？ 麦栽培において赤カビは最も重要視しなければならない。よって高湿度がもたらす赤カビ対策のために殺菌剤を使用することになる。人によっては10回近くも殺菌スプレーする。もちろん法律の範囲内の行為だ。ちょっと調べてみると殺菌剤の種類と回数と組み合わせで軽く100回を超すスプレーヤー散布が法律のもと、存在するのだからありがたい話だ。

Vol.109 付度(そんたく)しませんから!!



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

赤カビは農薬と育種家の努力の成果である抵抗性品種の登場でホボホボ問題のない所に着地できそうな感じだ。

だが収穫期における降雨から発生する穂発芽と呼ばれる現象には頭を悩まされる。麦の乾燥が進み収穫が近くなり、そこでシトシトと降雨が48時間も続くと穂発芽が発生して商品価値が著しく落ち、本来のパンやうどん粉には使用されず、

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

おもしろい鳥のえさになることが多い。

20年ほど前に、ある道内の麦生産者からそんなに赤カビや穂発芽のリスクがある長沼は麦の適地ではないんじゃない?と言うムカつくご意見をいただいたことがある。では現在そのような発言をした地域の麦はどうなのか?と言うことになる。惨劇、撃沈、不潔、赤面、不能、中折れ、役立たず状態である。数字で言うと5年間で4回の大不作だ。特に昨年は収量のみならず穂発芽被害もあった。

ではこの長沼ではどうだったのか? 少なくともJA以外の集荷業者と契約する優秀な生産者の小麦は一等である。理由は簡単だ。魔法の薬を使うからだ。正確には液体肥料になる。名称は亜リン酸、化学式はH₂PO₃。普通の固形リン酸よりも分子量が小さいため作物への移行が高いとされる。

使用方法は簡単だ。既存の3回程の殺菌剤散布時に亜リン酸液体肥料を追加するだけで穂発芽防止になる。この亜リン酸を使えば、ザックリ言ってジトジト雨の降水時間が48時間程度であれば高イビキでいることができる。品種にもよるが昔の品種であれば、亜リン酸なしの場合、24時間のジトジト降水で穂発芽が発

生して収入が半分以下になることがあった。

この亜リン酸は某農業会社にて殺菌効果があると政府の特許と言うお墨付きまで付与されたたいそうありがたい商品で、ついでに穂発芽防止もしつかり期待できるのだから使用しない生産者は長沼ではバカ扱いされても仕方がない。

農業は独り勝ちできる産業ではない

ここで冒頭の人生の選択が始まる。5年で4回も穂発芽等で被害が発生している麦の大産地が、この亜リン酸を使わないのだからクリントン大統領候補の支持者が日本で存在したくらい不思議なことである。コストは反当たり400円程度を3回だから決して高い訳ではない。販売先も大手ばかりだから怪しい薬ではないと明言できる。

私も農業会社もことあるたびに、この亜リン酸の使用をその地域の関係者に伝えてきたが、全く反応がない。その地域のヒトと話すとき、大したことではない、だったたり、私の所は大丈夫だった、と言う声をよく聞く。声には出さないがこいつら、悪性の自信過剰か日本語を理解できないんじゃないか、と思うがそれ以上に思うことがある。

現状が続くとその地域の麦は将来、製粉業界からどのような評価になるのだろうか。それはブランド力の低下だ。農業は独り勝ちできる産業ではない。心底思うのは北海道全体の農業が良くなり、全体のボトムアップがあつて農業やそのブランド力が発揮されるのだと思うが、その地域はそう考えていない独立独歩型がまかり通るようだ。

あと気象条件が変わってきているのも事実だ。間違つても北海道は温暖化になっていとは思わないが、地域的には降雪がなかった場所に普通に30cmくらいの積雪があつたり、集中豪雨の頻度も増えていると思う。

何を栽培するんだ

自分の農場の麦の発芽が良くない。北海道では一昨年くらいから原因不明の病気、小麦なまぐさ黒穂病なるものが発生している。一度発病すると3年間はその発生した圃場では麦が栽培できなくなるから、じゃー何を栽培するんだってことになり、その後の作物ローテーションに影響が出ることは間違いない。現実には特効薬の農業がないのは事実で、小麦を作り続ける連作をしない、くらいしか対策はないようだ。GM技

術でパーと解決しました!なんてことが起きればうれしいが、生産に関与しない無知で無垢な消費者が声を上げるのだったらまだしも、販売に関与しない生産者までがGM技術を否定する姿は日本の美学からは著しくかけ離れている。

現場では麦の種子に今までは一種類しか使っていなかった殺菌剤に、昨年の播種からおまけにもう一種類追加された。そのせいだ!との確証はないが、麦の発芽がものすごく悪い。大豆の生育中に麦を散播する場合は播種量を30%程度多くするが、それでも発芽率は平年の半分以下。ドリルで播種した所も発芽の勢いが著しく悪い。

さてどうしたものか:硫安肥料でも一本多くやるか。コストは反当たり800円だからトータルで56万の追加費用は頭が痛い、やらないと収量減は間違いないので背に腹は代えられないと言うことだ。これもあつての農業なことは分かっているが、対策方法がないのは何とも歯がゆい。金髪・ブルーアイと農業は根性、体力勝負と言うことだ。まっ、そのような現実を理解できない自民党支持の真正共産主義者に行政やいろいろな組織から利益をもたらす付度があるはずがないってことだね。